

## 壇ノ浦の桜

壇ノ浦は源平合戦の最後の戦場である。壇ノ浦の桜が散るのを見ていると、平家滅亡の悲劇まで思いが届く。

祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり  
 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす  
 おごれる人も久しからず  
 ただ春の夜の夢のごとし  
 たけき者もついに滅びぬ  
 ひとえに風の前の塵に同じ

この平家物語の冒頭な言葉は、平家の栄枯盛衰を語る中で、仏教の無常観を判りやすく現している。

平 清盛は保元・平治の乱の勝利により、武家の第一人者として武家政権の礎を築く。その後、清盛の娘である徳子が 1171 年に高倉天皇に入台し、平家一門は「平家にあらずんば人にあらず」といわれる程の全盛期を極める。

しかし、平家の隆盛を快く思わない者の反感が強まり、1180 年に源 頼朝が富士川の戦いで平家に勝利し、さらに「鶴越の逆落とし」で有名な一の谷の戦いで義経が勝利する。追われる平家は 1185 年壇ノ浦の海戦で平家の存亡をかけた最後の戦いに臨む。

### 壇ノ浦の海戦

1185 年（元暦二年）3 月 24 日、攻め寄せる義経水軍 800 艘と、迎え撃つ平家水軍 500 艘が壇ノ浦海戦の火蓋を切った。海戦に長けた平家は午前中の東流れに乗り優勢に戦いを進めた。しか

飄

々

広報委員

石田 健

し海戦は長引き、午後になると潮目が変わり西流れになった。潮の流れに乗った源氏が優勢になった。形勢不利と見た平家の諸將が相次いで源氏方へ投降する。これを見て平家総大将の知盛は、「見るべきほどの事は見た」と敗戦を受け入れ、碇を担いで海底に没する。続いて平氏の最期と覚悟を決めた清盛の妻の二位尼は孫の安徳天皇を両手で抱きかかえ「波の下にも都はございます」と答え、壇ノ浦の渦に舞うごとく身を投げた。その後、清盛の娘の建礼門院ら平家一門の女官たちも次々に渦へと身を投げた。

### 壇ノ浦 潮目変りて 桜散る

海戦に長けた平家は潮の流れに乗り、義経水軍を追い詰めた。しかし潮目が変わると、義経水軍は潮の流れに乗じて一気に平家水軍を打ち破った。

### 散り際を 大事に花の 咲き満ちる

栄華を誇った平家の総大将の知盛は最後の海戦の負けを覚悟し、もはやこれまでと碇を担いで海底に没した。散り際を見事に心得ている武将である。

### 渦潮に 飛花吸い込まれる 壇ノ浦

源平合戦の最後の戦いに敗れた清盛の妻の二位尼は孫である幼帝の安徳天皇を抱きかかえ、舞うように渦潮に吸い込まれていく。

### 壇ノ浦 渦まく潮へ 花吹雪

清盛の娘の建礼門院を始め、次々と平家の女官たちが壇ノ浦の渦に身を投げた。